

認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

東日本大震災 被災者支援 2015 年度 活動報告書



震災から5年の月日が私たちに語りかけたこと

レスキューストックヤード代表理事 栗田 暢之



東京・丸の内オアゾでの「東北これから会議 2015」で、加村真美さんとともに

今年度の当法人の活動は、震災当初から携わっている宮城県七ヶ浜町での支援活動を軸に、福島県宮里仮設自治会（楢葉町からの避難者）との交流や、愛知県や隣県への広域避難者に対する支援活動、各種ネットワークを通じた各種企画への参画等、年間を通じて様々な取り組みを進めて参りました。

これまで、その一つひとつの活動は決して独りよがりや支援者側の都合ではなく、必ず被災者が主体であること、とりわけ、足湯に代表される「生の声」を一貫してそばで聴き続けたこだわりは保ち続けて参りました。ただし、いつまで支援を継続するかは、財政的な問題も含めて、5年という月日は一つの区切りに思えました。現に、ちょうど1年前の4年目の時点では、規模の縮小や現地スタッフの撤退も考えていました。

しかし、七ヶ浜町の「きずなハウス」に通う子どもたちが、その存続を求めて署名を集め、町長に届けてくれました。また、人生初めてのアパート形態の公営住宅に移った住民からは、「あなたたちがいなくなるととても不安、どう

かももう少し慣れるまでいて」と懇願されました。同様に、宮里仮設自治会からは、「震災当初はたくさん来てくれたが、今はRSYだけ。これからも定期的に会いに来てほしい」と。そして、愛知県に避難されている方からは、「いろいろ決断しなければならない大切な時期なので、これからも相談に応じてほしい」と、来年3月までの応急仮設住宅の供与終了を受け、切実な思いを届けてくれています。

震災から5年の月日は、被災者と私たちとの「顔の見える関係」は遥かに過ぎ、いつのまにか「こころの通う関係」へと育んでいました。こうした様々な声を裏切るわけにはいきません。それは、5年では何一つクリアに解決していない震災の甚大さ、深刻さを物語るものであり、やはりもう少ししばらくは活動を継続する必要があると痛感しているところです。

今年度も、こうした活動を本当に多くの皆様方にご支援・ご協力を賜りました。心より厚く御礼申し上げます。今後とも引き続きご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願いいたします。

つながり育む新たな拠点づくりを

レスキューストックヤード常務理事 浦野 愛



RSYから第一陣として七ヶ浜町に初めて来たのは2011年3月26日。雪がちらつく中、災害ボランティアセンターに集まっていた中高生たちとともに、炊き出しや足湯を始めたときのことを、今でも鮮明に思い出します。活動の中では、住民の方々の深い悲しみや不安、戸惑い、先の見えない生活へのいら立ちや疲労感などが痛いほど伝わりました。子どもたちも苦しかったでしょうが、大人たちの懸命な姿を見たり、外からかけつけたボランティアと一緒に泣いたり笑ったり、励ましあう中で、人と関わっていくことの温かさや居心地のよさ、人間の強さを感じ取っていったのではないのでしょうか。

あれから5年。当時私たちの活動拠点だった「きずな館」

に毎日のように遊びに来てくれていた子どもたちが中学生・高校生になり、大学生が社会人へと成長して、再び新たな拠点となった「きずなハウス」に会いに来てくれるようになりました。ここでつながった子どもたちは、どこかで災害が起これば募金活動に協力し、公営住宅に入居したばかりで不安や寂しさを抱えるお年寄りにクリスマスプレゼントを届けるプロジェクトなどにも参加してくれています。さらに、「きずな号」や「はまのわ」企画には、町の大人たちも運営に一役買ってくださるようになりました。この場所が温かい人のつながりを育む大切な拠点として、子どもたちとともに成長し続けていけるよう、これからも名古屋から応援し続けたいと思います。

宮城県七ヶ浜町



七ヶ浜町は仙台市から15kmほど北東に位置する半島状の町。人口は約2万人、面積約13.3km²。

名前の通り「7つの浜」に囲まれ、漁業や観光が盛ん。「菖蒲田浜」は東北で最も古い海水浴場といわれ、家族連れをはじめサーフィンのメッカとして若者にも親しまれています。

昔ながらの漁師町のほか、仙台のベッドタウンとして新興住宅地も開発され、新旧の住民が入り交じた土地柄に。

スポーツ施設やホールが充実しており、外国人の避暑地だった歴史から造られた「国際村」では、地元の子どもたちを中心としたミュージカル劇団がつくられています。

**震度5強の地震後、最大12.1mの大津波が襲来。菖蒲田地区を中心に沿岸の集落に被害
津波浸水面積4.8km²（町面積の36.4%）**

死者108名、行方不明者2名

全壊674世帯、大規模半壊236世帯、半壊413世帯、一部損壊2,600世帯の家屋被害

町内36カ所の避難所にピーク時で6,143人の町民が避難

町内6カ所の仮設住宅に373戸、93名が入居

みなし仮設*には58世帯、166名が入居

（2016年2月29日現在）

*みなし仮設：民間住宅を国や自治体が借り上げて、仮設住宅の代わりとして被災者に提供したり、公営住宅や雇用促進住宅、被災者が自力で借りた賃貸住宅も仮設住宅とみなしたりした住宅を総称して「みなし仮設」とし、家賃などを国が負担している。

福島県楢葉町

福島県浜通りのほぼ中央に位置する人口約7500人の町。農業の他、サッカートレーニング施設「Jヴィレッジ」を中心とした観光地でもありました。しかし、震災によって状況は一変。震度6強の地震と津波に襲われ、東京電力福島第一原発の事故による影響で町の大部分が半径20キロ圏内の警戒区域に指定され、立ち入りができなくなりました。

震災による直接の死者は11名、関連死は122名。避難指示は2015年9月に解除されましたが、いまだ県内外に7381人が避難、うち157人が会津美里町の仮設住宅に入居しています。（2016年2月29日現在）



七ヶ浜事務局 2015 年度の活動

- 2015 年
- 4/1 (株)サークルKサンクスのセミナーへ参加 (きずな号・開放)
 - 4/20 名古屋J Cの七ヶ浜視察受け入れ
 - 5/16 第1回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう～海釣り～」開催
 - 5/29 愛知県被災者支援センター視察研修受け入れ
 - 5/31 松ヶ浜地区避難所落成式へ協力 (うるうるパック)
 - 6/20 「七ヶ浜まるごとBBQ」にポーちゃん焼きを出店
 - 7/7 ブラザー工業(株)の金字経贈呈式
 - 7/16 第1回七ヶ浜町総合開発審議会への参加
 - 7/25 第2回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう～海釣り～」開催
 - 8/2 「七ヶ浜町・地域の資源と将来のまちワークショップ」へ協力
 - 8/5～6 きずな号企画・朝日町キャンプの実施
 - 8/8 「町民夏まつり」にブース出店
 - 8/19～22 NaNa5931 名古屋公演・同行
 - 8/22 「宮里仮設住宅・ならば夏まつり」へ協力
 - 9/3 第2回七ヶ浜町総合開発審議会への参加
 - 9/12～13 ボランティアバス71陣
 - 9/13 「七の市商店街ありがとう祭り」へ協力
 - 9/25～26 きずな工房・名古屋ツアー
 - 10/3 「地域連携復興市 ゆめ博@塩竈市」にポーちゃん焼きを出店
 - 10/4 「親子すまいるフェスタ」へ協力
 - 10/7 福島県南会津町で災害ボランティア活動
 - 10/8 第3回七ヶ浜町総合開発審議会への参加
 - 10/10 第3回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう～ハゼ釣り～」開催
 - 10/17 第4回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう～ハゼ釣り～」開催
 - 10/20 JCN現地会議 in 宮城へ参加
 - 10/27 (株)山田組・(株)ナックプランニングときずな工房の交流会の開催
 - 10/29 NHKプレミアム「きらり! えん旅」取材
 - 11/6 向洋中学校・総合学習聞き取り調査へ協力
 - 11/7 「よしかねたくろうツアー in 菖蒲田浜地区避難所」への協力
 - 11/7～29 「しちがはま展覧会はまのわ」開催
 - 11/11 まち・ひと・しごと創生部会(合同会)へ参加
 - 11/12 「仙台鍋まつり」にポーちゃん焼きを出店
 - 11/14 「七ヶ浜ポッケパーティー」へ協力
 - 11/19 第4回七ヶ浜町総合開発審議会への参加
 - 11/26 復興庁主催「心の復興交流会」へ参加
 - 12/8 きずな工房4周年記念会へ参加
 - 12/12 きずなハウスリニューアルオープン
 - 12/25 「公営住宅に子どもサンタがやってくる」開催
まつかぜ児童館・クリスマス企画へ出張駄菓子屋の開催

- 2016年**
- 1/30 きずなハウス餅つき大会を開催
 - 2/13 「宮里仮設住宅・ならは冬まつり」へ協力
 - 2/21 「うみの駅 七のや」オープニングイベントにポーちゃん焼きを出店
 - 3/11 七ヶ浜町慰霊祭へ参加
 - 2/27 サークルKサンクス店頭募金贈呈式の開催
 - 2/29 JCN 現地会議 in 宮城へ参加
 - 3/13 3.11 メモリアルイベントへ協力
 - 3/18 きずな工房閉所式へ参加
 - 3/19 第5回「きずな号で七ヶ浜を学ぼう～海苔すき体験～」開催

七ヶ浜事務局 定期開催の活動

- 仮設店舗七の市商店街での企画ミーティング・月1回
- 仮設住宅集会場にて足湯・月2回程度
- 花洲浜まじらいん会送迎・月1回
- 復興支援調整実務者会議への参加・月1回
- きずな工房定例会議・月1回
- きずな号（学習スペース）の開放・閉所日以外で毎日
- 七ヶ浜復興応援サポータープロジェクト運営会議・月1回



名古屋事務局 2015年度の活動

- 2015年**
- 4/18、4/22、4/26、4/29、5/9 大口町倉庫、うるうるパック化作業
 - 5/17 北名古屋市「ミネハハコンサート」きずな工房商品委託販売
 - 5/18、5/20、5/30、6/6、6/13、6/27、8/12 大口町倉庫、うるうるパック化作業
 - 8/20 名古屋市「東日本大震災復興応援企画・育もう！子どもたちの元気な笑顔を！」で NaNa5931 による「ゴーへ」公演実施（2回）、きずな工房商品販売
 - 9/7 大口町倉庫、うるうるパック化作業
 - 9/11～14 七ヶ浜町へ向け、ボランティアバス71陣の運行
 - 9/19 名古屋市「環境デーなごや2015」で、きずな工房商品の販売
 - 10/24～25 「名古屋学院大学大学祭」できずな工房商品委託販売
(災害復興支援チームあすなろ)
 - 11/6～7 名古屋市「商店街逸品名品テストマーケティング」で、きずな工房商品販売
 - 11/21 大口町倉庫、うるうるパック化作業
- 2016年**
- 3/11 東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや運営（実行委員として）
 - 3/11～14 七ヶ浜町へ向け、ボランティアバス72陣の運行
 - 3/26 名古屋市「空色曲玉」できずな工房商品委託販売

足湯ボランティア

足湯は、湯に足を浸けて「ホッと一息つける」空間をつくり、住民とボランティアが1対1でゆっくりと会話をし、肉体的な疲れやストレスを少しでも解消してもらう活動です。内容は主に日常会話ですが、悩みやこの先の不安を話される場合があります。そうした



きずな工房

2011年12月にオープンし、生きがいと集いの場づくりを目的に活動を続けてきた「きずな工房」は、災害公営住宅の完成などに伴い、15年3月31日をもって閉所しました。RSYは運営と工房製品の販売などのサポートの他、役場や社協と月1回のミーティングで企画の調整などをしました。15年度はこれまでに支援をいただいた愛知県の企業やボランティア団体を訪問するツアーを、運営主体の町社協と企画し、工房利用者5名とともに支援者へ感謝を伝えました。

工房はいったん区切りとなりますが、利用者の「こ

住民の声、「つぶやき」を専門機関などにつなげることで、個別化した課題を解決していくことも足湯の役割の1つです。

2015年度は東北学院大学災害ボランティアステーションの学生らと協力して毎月2回活動。実施回数は11年3月から累計320回、利用された住民は延べ3550名、活動したボランティアは延べ1800名を超えました。約9割の方々が仮設住宅から災害公営住宅や高台移転地へ転居したため、15年12月末を持って仮設住宅での足湯は終了となりました。これからはこの5年間の足湯活動を通じてできた人とのつながりを災害公営住宅支援などにつなげていきます。

れからも続けて行きたい！」との声で、来年度から利用者主体のサークルとなり、活動を続けて行くこととなりました。



災害公営住宅

町内全ての災害公営住宅の鍵渡しを終了し、入居した住民から「やっと落ち着いた。広くなったから友達呼んでお茶のみができるわ」という安堵の声もありま



す。しかし、「仮設にいるころより人と会う機会が少なくなってさびしい、集会所はあるけど誰も使っていないので使いづらい」「避難所などで使う備品は区費でそろえなければならないが、移転などで区民も減り、そろえるのが難しい」など不安の声も聴きます。

RSYはこのような声をつなぎ、近藤産興株式会社から避難所で使用する備品を提供していただいたり、クリスマスにはブラザー工業株式会社からいただいたマイバッグにプレゼントを入れ、地域の子どもたちと一緒に災害公営住宅や防災集団移転地を訪問し、入居者と地域住民の交流の場を設けるなどの支援をしています。

うるうるパックの配布

今年度から、仮設住宅などで避難生活を送っていた方が順次、災害公営住宅などへ移転をし始め、新たなつながりが必要とされています。一人ひとりの暮



らしの状況についてお聞きするコミュニケーションツールとして、また被災地域全体の新しいコミュニティの醸成に役立てていただくことを目的とし、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）の助成を受けて「うるうるパック」をお届けしました。

R S Y大口町倉庫を拠点とし、名古屋のボランティアだけでなく、大口町社会福祉協議会や大口町で活動している災害救援ボランティア、「防災ボランティアD・サポート丹羽」の協力もあり、延べ289名がパック化作業に参加。約1万8000パックを被災地域にお届けしました。

きずな号

平時は勉強スペースとして開放するほか、地元漁師の協力のもと、釣り体験やノリすき体験ができる「きずな号で七ヶ浜を学ぼう」を年間5回開催しました。

被災後、「浜は行ってはいけない場所」との認識が強くなっていますが、海に囲まれたこの町で暮らす子どもたちに「海に触れ、楽しい場所と認識してもらいたい。自然の大切さや自分の町の魅力を再認識できるように」という声から始まったこの企画。参加して初めて釣りをし、「次はもっと釣りたい」という子や、口コミから回数を重ねるごとに参加者も増え、さらには釣り道具を自分でそろえ、家族で出かけるようになったとの声も聞かれるようになりました。町内での体

験学習だけでなく、夏には「友好の町」山形県朝日町を訪れ、子どもたち同士がお互いの町のいいところを紹介しあうなど、交流の機会を設けた宿泊企画も実施しました。



県外支援者を現地とつなぐ



金字経 ブラザー工業株式会社から依頼を受け、七ヶ浜町で被災を受けた同性寺へ、名古屋市の写真作家から金色の字で写経した金字経による般若心経を寄贈する橋渡しを行いました。現在、この般若心経は同性寺に常時掲示されています。

カレンダー 震災以降、名古屋の坊主、でらボラ NAGOYA の隠さんは年2回、町内の仮設住宅を訪問し、線香やろうそくを配布。今年はカレンダーをお送りくださいました。3月には公営住宅で住民らとひな祭りを開催するなど、息の長い支援を継続しています。



仮設店舗「七の市商店街」

R S Yは毎月1回の定例ミーティングで店主と商店街の独自イベント「んめえのあっと市」や「ありがとう祭り」の企画調整、イベント運営のサポートなどを行いました。移転先での店舗建設が進んだため、2015年11月に店主全員の再建をもって商店街は閉所となりました。11年12月のオープンから約4年間、商店街を利用していただいた住民、応援していただい

たボランティアや支援者の方々に感謝の気持ちを伝えるため、9月13日に「ありがとう祭り」を開催しました。毎月のイベントなどの取り組みを欠かさず、町の復興情報の発信拠点や住民の憩いの場所として愛されてきた「七の市商店街」。その閉所は残念ですが、再建先での店主の再スタートを応援していきます。



きずなハウス

2014年12月14日に仮設店舗「七の市商店街」内にオープンしたR S Y事務所兼地域のコミュニティスペース「きずなハウス」は、商店街の閉所とともに2015年12月12日、七ヶ浜町老人福祉センター内へ移転しました。

以前と変わらず、大人も子どもも楽しめる200種類以上の駄菓子コーナーや町内各種のお知らせやイベント情報を貼りだす情報掲示板、そしてイスとテーブル約30席を設置して、町民の皆さんの憩いの場づくりをしています。

平日の午前中はご年配の方々のお茶のみ場として、午後からは子どもたちの勉強スペースや遊び場として、月平均約1600名に利用されています。子どもたちの親世代の利用も増えてきており、町民やボランティアの隔てなく利用ができる新たな観光名所になっています。

ハウス内で作っている町の観光キャラクターを模した「ぼっけのポーちゃん焼き」は口コミでどんどん評判が広がり、七ヶ浜町の新名物として町民の皆さんに親しまれています。



しちがはま展覧会はまのわ

七ヶ浜で暮らす若者、子育て中のお母さんたちが自分たちの町について考えるワークショップを開いたのをきっかけに「人のつながりの強さや地域の輪を大切しながら、町の魅力を子どもたちに伝えていきたい。そして七ヶ浜を好きになってもらいたい」と考え、実行委員会を立ち上げて町の魅力を紹介するための展覧会を開催しました。

11月7～29日までの間、七の市商店街102号室で町内各所の風景や漁師の写真、新聞記事や絵画を展示し、会期中に500名近くの方が来場。初めて見る町の姿をくい入るように見ていたり、昔の七ヶ浜を懐かしみ、思い出話をしたりする人で賑わいました。楽しそうに思い出話をしている様子に「子どもたちが思い出

をつくれる町にしたい」という声が出てきました。そこで「もっと自分たち自身が七ヶ浜のことを知り、伝えることができるように…」と町歩き企画を計画するなど、積極的に次のステップに向けて動き出しています。



みんなの家はまのわ（仮称）

2014年度と同様に15年度も「東北の子どもたちに幸せな笑顔を贈ります」をテーマに、株式会社サークルKサンクス全国約6000のコンビニエンスストア店頭で8月1日～11月30日にかけて計1717万2746円の募金が集まり、R S Yへ寄託されました。この募金を基に、子どもたちの憩いの場づくり・地域の交流スペースを目指し、町内に「みんなの家はまのわ(仮称)」

の建設を進めています。「はまのわ」では駄菓子やボーちゃん焼はもちろん、多目的スペースを設け、地域の交流スペースとして活用していきます。また、きずな号と連携しながら、町内外の子どもたちが七ヶ浜町の自然を体験できるプログラムも計画。建設にあたり、みんなの家プロジェクト・近藤哲雄建築設計事務所に協力いただいています。

七ヶ浜復興応援サポータープロジェクト

「ボランティアにとって、七ヶ浜町を『被災地』ではなく『また訪れたい場所』にしてもらうため、内か



ら外への情報発信したい」

こうした目的に沿って、復興に携わる地元団体と実行委員会をつくり、復興の歩みや七ヶ浜町の歴史、イベント情報案内などをブログ、Facebook、twitterなどのウェブ媒体でお伝えしています。

震災から5年が経過し、町の風景や住民の暮らしが復興へ向けて少しずつ変わってきており、より一層情報発信が重要になってきています。今後は七ヶ浜のさらに細かな情報も常時発信できるようにし、かつ町内有志のみで運営できるような仕組みづくりを考えて活動を展開していきます。

育もう！子どもたちの元気な笑顔を

七ヶ浜を拠点に活動するミュージカル劇団「NaNa5931」の舞台「ゴーへ GO Ahead」の3年ぶりとなる再演を、夏休み中の8月20日に名古屋市のウインクあいちで催しました。

午後と夜の2回公演で観客は延べ1500人にもものぼり、大盛況でした。華やかなステージを通じて、被災



地のメッセージをできるだけ多くの愛知・名古屋の子どもたちに届け、震災のことを忘れないでほしいと呼び掛け、福島から愛知に避難している4人の小、中学生の朗読も観客の胸に突き刺さりました。



「子どもたちの元気な笑顔を」を合い言葉に、実行委員会形式で8カ月準備。ユニグループ・ホールディングスをはじめ、多くの企業や市民活動団体のご協力と100人近いボランティアのみなさまに支えられての実現となりました。

漁業支援：七ヶ浜町ぼっけクラブ七友会

R S Yは漁業支援としてNPO法人「7seeds Japan」とともに、七ヶ浜町の漁師らが運営する「七ヶ浜ぼっけクラブ七友会」の企画・販売促進などのサポートを行っています。今年度は「七ヶ浜町のうんめえ鮮魚を食べてもらいたい！」との漁師の思いを形にしようと、「七ヶ浜町・お魚カレンダー」を作成。また、過去2年間のセット販売とは異なり、七ヶ浜の旬な魚を消費者が自ら選ぶセット通販を開始しました。

11月には毎年恒例となっている、町特産のポッケ（ケムシカジカ）をふるまうポッケパーティーを開催。若い世代の「魚がさばけない」との声から、「魚

のさばき方講習会」も行い、七ヶ浜の魚を町民にもよりいっぱい食べてもらえるように工夫しました。



被災地交流（会津美里・七ヶ浜）

R S Yは福島県楡葉町の方々が避難している宮里仮設住宅（同県会津美里町）と、2013年度から交流を続けています。今年度は8月22日に宮里仮設住宅



自治会が開催した「ならば夏祭り」で七ヶ浜産のタコやアナゴの浜焼きブースを出店、2月13日の「ならば冬まつり」でのイベント協力などを行いました。

昨年度は七ヶ浜町民とともに美里町を訪問し、交流企画をしましたが、今年度は11月に七ヶ浜町内で開催したポッケパーティーに、宮里仮設住宅の住民13名が参加され、楡葉名物の「マミーすいとん」を提供していただくなど、被災地間交流も進んでいます。

楡葉町は15年9月に避難指示が解除されましたが、インフラ整備が課題となり、宮里仮設にはいまだに100世帯弱が避難生活を余儀なくされています。

ボラバス派遣

東日本大震災直後から、生活協同組合連合会アイチヨイスの寄付助成を受け、ボランティアバスを運行しています。今年度は計2回(9/11~14、3/11~14)運行し、名古屋から約50名のボランティアを送り出しました。

仮設住宅の住民との交流会や住民(七の市商店街や地元漁師)主催イベントの運営サポートを中心に、9月は七の市商店街最後のイベント「七の市商店街ありがとう祭り」の運営サポート、3月は東日本大震災追

悼「3.11 メモリアル企画 七ヶ浜 UMI-TSUNAGU2016」に参加し、住民との交流を深めました。



3・11 メモリアルイベント

今年で4回目となるこの企画は「震災で犠牲となられた方々へ哀悼の意を捧げる」「次の災害への教訓として、地元子どもたちや他の地域の方々に語り継ぐ機会をつくる」「『出会い／きずな』への感謝の気持ちを形にし、交流を深める」を目的として町民有志が企画・運営を行いました。RSYも実行委員として2015年6月から合計20回以上の打ち合わせに参加し、運営を支えました。

当日は町内外450名以上の方々が訪れ、住民とボランティアが再会を喜び合う姿が会場の至るところで見られました。企画内では住民が感謝の気持ちを伝えようと参加者全員に町民手づくりのお土産品を配布したり、被災当時の対応を住民から聞く防災シンポジウムの開催、子どもたちに分かりやすく七ヶ浜で起きたことを知ってもらうため、住民の声から紙芝居を作成し、公演したりしました。



復興のまちづくりへの取り組み

七ヶ浜町では2016(平成28)年度から20(平成32)年度までの長期総合計画・後期基本計画、総合戦略の策定のための総合開発審議会を組織するにあたり、RSYの松永が委員を委嘱され、計4回の審議会へ参加しました。住民満足度調査から、公共交通(バス)の改善、子どもたちへのふるさと教育の推進、産業・観光業の復興などで意見を答申しました。

また、東北大学主催で地元中学生を対象にした「地域の資源と将来のまちワークショップ」へ協力し、子どもたちと町の将来を一緒に考えました。子どもたち

から、土地の起伏を活かしたマラソンコースや農漁業体験ツアー、公共交通の利便性向上などの提案がありました。



JCN、JVOAD

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）は今年度も栗田が代表世話人の立場を継続し、岩手・宮城・福島各県での現地会議を各2回実施しました。仮設から恒久住宅へと移り変わるステージの中で、孤立・孤独、地域コミュニティの高齢化・過疎化、復興の地域間格差、ボランティアの減少などをテーマに、被災地が抱える現状と向き合いました。

また、広域避難者支援ミーティングを全国各地で開催し、いまだ解決策の見えない原発問題に翻弄され続ける避難者やその支援者との対話を続けました。関西学院大学災害復興制度研究所が発刊した『原発避難白書』の執筆も担当し、大きな反響がありました。こうした5年間の取り組みの流れを受けた「全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）」準備

会にも参画し、次の広域災害に向けた多様なセクター間との連携の再構築にも取り組みました。



『原発避難白書』。社会にも行政にも把握されていない避難の実態とその背景をまとめ、48人の執筆・協力者により発行した

JVOAD準備会主催の「災害時の連携を考える全国フォーラム」(2016年2月)。オープニングで東日本大震災の3県域での活動を振り返りながら、どのような連携が事前に必要か議論した



災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）

災害ボランティア活動支援プロジェクト会議、通称支援Pは今年度も栗田が幹事の立場を継続し、岩手・宮城・福島各県での社協とNPOをつなぐ定期協議や各被災地への巡回訪問を続けました。



ますます課題が個別化していく中であって、被災者本位・地元主体の原則を貫きつつ、減少する支援をどうつなぎとめ、今本当に必要な支援は何なのか、そのための有益な取り組みはどんな活動なのかなど、難しい局面を迎えながら関係者との対話を続けました。

また「新生活応援」として、主に災害公営住宅に転居した方々を対象に「うるうるパック」を合計1万8000セット配布し、RSYが主管しました。受け取った被災者からは、「私たちのことを忘れずにいてくれることが本当にうれしい」など、続々とお礼の言葉や手紙が届けられました。

愛知県被災者支援センター

愛知県には2016年2月末現在、428世帯1055名が県外避難されています。県はRSYを含めた県内のNPO4団体にセンターの運営を委託し、避難者一人ひとりに寄り添った支援を行っています。

2015年度も各世帯の状況を把握するため、個別訪問を実施。要支援と判断された世帯について市町村や社会福祉協議会、専門家らと交えた支援調整会議を開

き、それぞれの状況に合わせて具体的な支援方法の検討や調整をしています。

住宅支援の終了が決まっているが、今後の定住先が未定で不安を抱えている世帯もあり、毎年開催している全体交流会では住宅や被災3県の状況について相談できる体制を例年以上に整えました。これからも一人ひとりの決断を尊重し、支援を継続していきます。

東日本大震災支援ボランティアセンターなごや

名古屋市社会福祉協議会が主体となり、RSYや各区の災害ボランティアネットワークで構成する「なごや防災ボラネット」が協力して運営。市内に避難されている方の支援に当たっています。震災から5年が経ち、名古屋を終の棲家としてくださる家族も増えてきましたが、一人暮らしや高齢者の生活支援、福祉に関する相談も多くなっています。

設立時からのモットー「寄り添い、ゆっくりと、でも全力で応援します」を大切に、地域へもつながるよう、引き続きニーズに合わせた支援を展開していきたいと考えています。

《毎回実施の「お茶っこサロン」参加者の声》

おいしいもち、ごちそうさまでした。名古屋ではいつ

も楽しいイベントがたくさんあってとても楽しくすごすことができました。来月地元に戻ることになりましたが、名古屋でお世話になったことは忘れません。ありがとうございました。



1月に東区在宅サービスセンターで行われたお茶っこサロン（もちつき）

きずな工房品の販売



きずな工房の製品を名古屋で販売する機会は2015年度に8回ありました。ミネハハコンサート（5/17、北名古屋市）、名古屋学院大学大学祭（10/24、25、名古屋学院大学）などをお願いしたケースでは、売り手さんの思いも一緒に伝えながら販売していただきました。NaNa5931 公演時には、一番多く売れました。年々、製品自体の完成度の高さはもちろん、パッケージもかわいらしくなっていて、新しく仕入れた物から先に売れていってしまいます。

県外支援者を現地とつなぐ

アクセサリ RSYの被災地支援活動に賛同いただき、岐阜県の個人ボランティアさんが、幅広い年代層が利用できるネックレスやブレスレットを送ってくださいました。このアクセサリは「きずなハウス」で子どもから大人まで約100名の町民にお渡ししました。



毛糸の靴下 安城のボランティアさんからいただいた約100足の毛糸の手編み靴下をきずなハウスのお客さんへお配りしました。「温かいからお風呂上りに履いて、そのまま寝ちゃうんだよね」「温かいから編み方教わって編んでみたい」ととても気に入っている様子でした。



七ヶ浜町長 寺澤 薫

あの忌まわしい東日本大震災から5年が経過いたしました。認定特定非営利活動法人レスキューストックヤードの皆様には、震災直後から現在に至るまで多方面にわたりご支援いただいておりますことに、町民を代表して厚く御礼申し上げます。

本町では、昨年末に高台住宅団地整備及び災害公営住宅の建設・引渡しが完了し、復興事業は次のステージへと移ることとなります。ここに至るまでには、皆様方から数えきれないほどの温かい支援を頂きまし

た。改めて深く感謝申し上げます。

今後はハード面の復興と併せて、地域コミュニティ再生などソフト面の復興に取り組んでまいります。レスキューストックヤードの皆様はじめ関係者の皆様には、今後ともお力添えをいただきますよう、お願い申し上げます。

結びにレスキューストックヤードのますますのご活躍、皆様のご多幸とご健勝をお祈り申し上げ、メッセージとさせていただきます。



七ヶ浜町社会福祉協議会会長 塩野 信臣

R S Yの皆様には長期間にわたりご支援をいただいております事、心より感謝を申し上げます。

震災当初に栗田代表から頂いた一言、「私達は外部支援者、いずれ七ヶ浜から撤退する日が来ます。支援のノウハウをお伝えしますので、後は町民の皆さまの力で復興に臨んで下さい」。この言葉を私たちは常に肝に銘じ5年目を迎えました。お陰様で「災害ボラン

ティアセンター」はその役割を縮小し、地域住民の力で地域福祉を視点に新たな活動に取り組んでいます。「きずな工房」も3月で閉所し、4月からはサークルとして再出発します。これも復興の証しであると考えております。

温かなご支援を頂きました皆さまに改めて感謝を申し上げ、R S Yの益々のご清栄をご祈念いたします。



元「七の市商店街」代表 星 仁

大震災から5年を迎え、我が七ヶ浜町は県内で最も早く、昨年12月に災害公営住宅、防災集団移転高台団地造成が各町内5か所で全面完成し、移転や引っ越しも加速しています。

私も仮設住宅、そして仮設店舗（七の市商店街）から昨年11月に引っ越しして、笹山高台団地にて新店

舗を建築し、営業再開。新たな気持ちで復興の第一歩を歩み出しました。順風満帆なことばかりではないと思いますが、仮設住宅、特に七の市商店街で培った絆等を大切にしながら自分、そして七ヶ浜町のさらなる復興を願いつつ、移転をした笹山地区町内会の発展につながるよう、微力ながら頑張るつもりです。



七ヶ浜町ぼっけ倶楽部七友会代表 鈴木 直也

今年で震災から5年の節目を迎えました。この5年間で自分なりに振り返ってみると、ただひたすら前に突っ走るしかなかったです。

町の復興、漁業の復興を願い、家族、仲間と頑張る日々。復興とは何だろう？と思ったとき、すぐに浮かんだ言葉が「町民の一人ひとりが安心して暮らせる七ヶ浜」だと思いました。

正直、まだまだ復興への道のりは長いですが、町民みんなが本気で立ち上がり、熱意があればすごい原動力になるはずですよ。

これからも共に力と心を合わせ前に進みましょう。そして今まで七ヶ浜を支援、応援してくれた全国の皆様へ感謝の気持ちを忘れず、励ましの声を明日の活力として、これからも精一杯頑張っていきたいです。



七ヶ浜国際村事務局長 高橋 勉

皆様からいただいたのは“希望”です

あの日から早や5年が過ぎようとしております。こうして七ヶ浜町の子どもたちが元気で笑顔になれましたのも、皆様からの温かい励ましのお言葉、数々のご支援があったからこそでございます。

これまで、名古屋大学豊田講堂、ウィンクあいち

と2度も NaNa5931 をお招きいただき誠にありがとうございました。今でも、あの喝采をいただいた感動のシーンは心に鮮やかに焼き付いております。

あらためて、レスキューストックヤード様をはじめ、ユニグループ様、東日本大震災復興応援企画実行委員会の皆様に御礼を申し上げます。



きずな工房支援員 和泉 真理

平成23年12月にオープンした「きずな工房」も、今年3月31日をもって閉所することとなりました。

支援員として、はじめは何をどのように進めたらいいのかかわからず、戸惑いもありましたが、RSYの皆さんに運営のお手伝いをしていただき、4年余りの活動を終えることができました。被災された方々が物づくりをしながら楽しく工房で過ごすことができたの

も、多くの皆様からの温かいご支援、ご協力をいただいたお陰だと心より感謝申し上げます。

工房を利用されたほとんどの方が高台移転や町営住宅入居など新たな生活を始めています。これからまた新しい環境に慣れ、落ち着いた生活が送れますよう心より祈っています。

RSYをはじめ、これまで工房を支えてくださいました全国の皆様、本当にありがとうございました。



福島県楡葉町・宮里応急仮設住宅自治会長 渡辺 敏正

震災から丸5年が経とうとしています。今思うといろいろな支援をしてくれた方がいました。その中でも長年携わっていただいたNPOの方々はおくわすかでしたが、特に交流が深かったレスキューストックヤードの存在は、私たち自治会にとってすごく大きな存在でした。

これからは私たちも一人ひとり自立をしていかなければなりません。今まで支援していただいたことを忘れずに頑張っていきたいと思っております。

双葉郡も平成29年度3月いっぱい、帰宅困難以外は解除となります。その中でも楡葉町は先陣を切って27年9月に解除となりました。これからは29年度に向けて、町も医療やショッピング、また住居などの問題を解決していかなければなりません。これからの町の状況を見て戻られる町民の方もいれば、仮設にいられるだけいたいと言う方もいるので、自治会としては仮設に町民の方が入居している限り、自治会を継続していきたいと思っております。



きずなハウス利用者 星 由美子

きずなハウスありがとう！

私たち親子は、きずなハウスにすごく助けられています。子どもの習いごとの終わりに寄っては、ストレスを発散させてもらっています。スタッフの方々がとても親切なので、それに甘えて子どもとの待ち合わせ

場所にしています。子どもだけで安心していける場所って他にないですから、私にとってはなくてはならない場所になっています。

これからもいっぱい利用するので、よろしくお願いたします。



はまのわ展覧会実行委員 渡邊 和子

今回「はまのわ」に参加し、実行委員メンバーだけでなく来場された方に展示された写真や絵に言葉を添えていただいたことで、当時の様子や思い出を他の人と共有することができました。そして実際にお話を聞いたことで、七ヶ浜町の歴史や文化に触れることができました。

この町に嫁いできて十数年ですが、今回この展覧会を通して、ここ七ヶ浜で暮らす町民として、子どもたちに七ヶ浜の魅力や歴史を伝えられるようになりたいと思うようになりました。「はまのわ」を次世代へとつないでいき、七ヶ浜町のこれからの歴史を創りあげていけたらと思います。



きずな号利用者 最上 真実

私たちの救世主 きずな号

私には、小学4年生の息子と1年生の娘と3歳の双子がいます。小学生2人が宿題を始めると、双子がじゃまして進まない、ということが続いていました。当時、仮設住宅に住んでいたため、部屋を別々にすることもできず、双子はまだ言葉を理解できる年齢でもなく、苦悩していました。そのようなときに「きずな号」と出会いました。

週1、2回程度の利用でしたが、子どもたちにとっても、私たち親にとっても救世主となりました。きず

な号では、RSYの方たちが必ず1人いて、子どもたちの様子を見てくれているので、安心して利用させることができ、子どもたちも宿題を集中して終わらせることができました。

子どもたちがRSYの方々にとっても親しみを持ち、何でも話せるいい関係なので、継続して利用していくことで、子どもたちが大きくなっても、親しい大人の先輩としてアドバイスいただけたらなと思います。そうしてRSYの方々とは長くお付き合いしていければ幸いです。



「うるうるパック」ボランティア 安藤 巖

大口町の災害救援ボランティアも昨年の3月から数十回にわたって「うるうるパック」のパック化作業に参加しました。

他市町のボランティアもあわせて、多いときで30名、少ないときでも10名程度が参加し、作業を行ってきました。長時間の立ち仕事のため、辛い作業でしたが、被災者の方々の喜ばれる顔を思い出すとなぜか

すがすがしい気持ちになり、次回も参加したい気持ちになったのを思い出します。私事になりますが、2011年6月に岩手県遠野市に拠点を置き、1週間にわたって大槌町、南三陸町でボランティア活動をしたこともあり、一面の瓦礫状態を見た関係から被災者の方々のご苦勞を思い、早々の復旧、一日も早く元の生活に戻られることを熱望してやみません。



一般社団法人名古屋建設業協会会長 株式会社山田組代表取締役 山田 厚志

笑顔がつかないでいく

七ヶ浜の皆さん、お元気ですか？

震災から早5年。壊れてしまった街は徐々に再生してきましたね。昨年秋に訪ねた時は、高くなった堤防や住宅のコンクリートの白さが眩しかったです。

震災を機に太く強くなった人々の心の絆はどうですか？ 寄せ合っていた肩の距離が離れるに従って、細く弱くなっていないかいいのですが…。

あの震災に遭ったのは運命だったと思いますし、そ

の結果、私や私の仲間たちが遠く七ヶ浜の皆さんと出会ったことも運命だったと思います。そのご縁をこれからも大切にしながら、笑顔で七ヶ浜を想い続けたいと思っています。

笑顔はどんな堤防より強く美しく、そして運命を柔らかに受け入れて前を向いて生きていく意志に変える力を持っています。皆さんと私たちも、皆さんと未来の大人たちも、素敵な笑顔でつながっていきましょう。



ブラザー工業(株)コーポレートコミュニケーション部 岩田 俊夫

ブラザーグループでは、「現地のニーズに合った、支援の効果が見える活動」「被災者の“生きがい創り、しごと創り”につながる活動」「従業員の積極的な参加」を3つの柱に震災復興支援活動を行ってきました。会社の仕組みとして従業員の募金口座「絆ファンド」を設立して寄付を集め、公園を整備したり、住民の交流の場づくりとしてイベントを開催し

するなど、RSYを通して七ヶ浜町への支援活動を行ってまいりました。また昨年は自社製のミシンを使って従業員有志がエコバッグを作り、RSYスタッフから災害公営住宅にお住まいの皆様にご配布していただき、大変喜んでいただけたと伺っております。震災から5年が経過しましたが、復興はまだ道半ばだと考えており、今後も継続的な活動を行ってまいります。



ユニーグループ・ホールディングス(株)環境社会貢献部長 百瀬 則子

七ヶ浜の子ども達に 幸せな笑顔をおくりたい

今年も七ヶ浜の子ども達に、全国からの声援と一緒にプレゼントを持って訪ねました。

今年は「みんなのいえ」をサークルKサンクスのお店の募金で建てます。

設計や資金の一部は「みんなのいえプロジェクト」に手伝っていただきました。

子ども達が思い出をつくれるようなすてきな家を、町の皆さんや子ども達にも参加してもらって建てるのです。なんだかワクワクしてきます。大人になった子ども達が世界中で活躍して、七ヶ浜に帰ってきたら、子どもの頃過ごした「みんなのいえ」に集まる。そんな場所にしたいと思っています。

ユニー(スーパー)はハーゲンダッツと一緒に幼稚園に楽器を贈りました。



(株)サークルKサンクス運営本部運営企画部 金子 修之

昨年、2回目となる「東北復興支援募金」を全国のサークルK、サンクス店舗で実施しました。グループの社会貢献活動テーマ「未来の子ども達に幸せな笑顔を贈ります」に則り、サークルKサンクスでは「東北の子ども達に幸せな笑顔を贈ります」を募金テーマに展開しております。

1回目は、キャンピングカーを改造した移動式学び

舎「きずな号」を寄贈しました。今回は、子ども達の交流スペースや年配の方々の集会所など、いろいろな用途に活用できる「キッズハウス」の建設を支援して参ります。サークルKサンクスでは引き続き、レスキューストックヤードを通じて東北の子ども達に幸せな笑顔を贈り、学びの場を被災地の子ども達へ届けてまいります。



生活協同組合連合会アイチョイス専務理事 大宮 隆博

これからもずっと

ふと、阪神・淡路大震災の5年目の新聞記事を探してみた。神戸の市民団体の呼びかけにより、全国各地でろうそくの火を灯す催しが行われ、名古屋市でも15,000本のろうそくで「1.17 AICHI」のメッセージが浮かんだと記されていた。各地であの時を想い、親しき人を想い、追悼の時間が流れた。誰もがあの時を

「忘れない」「忘れてほしくない」と…。

東日本大震災から節目となる5年。復旧、復興は少しずつ進んでも、被災地にとっての時間はまだまだ通過点でしかないのかもしれないかもしれません。私たちがしてきたことがどれほどのことかは分かりませんが、少しでもお役に立てているのなら、これからもずっと「想い支えあい つながりあう」そんな活動を続けていけた



国際ソロプチミスト名古屋会長 恒川 陽子

真心を届けたい

国際ソロプチミストの40周年記念事業として東日本大震災救援基金を立ち上げてからやがて5年。RSYとのご縁を得て「被災者へ真心を届けたい」という思いで奉仕活動をしてまいりました。

きずな工房でのふくろう作り、綱引き大会の備品贈呈と応援、N a N a 5 9 3 1 の名古屋公演等、七ヶ浜

の皆さんとの交流は私たち会員の心の中に深く刻まれるものでした。

公営住宅への入居も進み、3月にはきずな工房も閉所されます。七ヶ浜の皆さんが悲しみの中にも前へ向かって着実に歩まれていること、そしてRSYの5年間の誠実な支援活動に深い感慨を覚えます。今後も私たちはRSYとともに真心を届けていきます。



岡谷鋼機(株)企画本部企画部 高橋 完

震災からまもなく5年、被災された方々にあらためてお見舞いを申し上げます。

岡谷鋼機は、2015年にRSYをはじめとするNPOのみなさん、東海地区の企業の方々とともに、東日本大震災復興応援企画実行委員会に参画し、七ヶ浜町に拠点を置く劇団「N a N a 5 9 3 1」のミュージカル上演のお手伝いさせていただきました。

また、微力ではありますが、岡谷グループの支援活動として、募金活動やボランティア活動をさせていただきました。

公演の舞台で躍動する子どもたちの姿に、たくさんの感動、勇気、元気をもらいました。今度は、子どもたちとの再会も楽しみに、七ヶ浜国際村を訪れたいと思います。

RSY七ヶ浜スタッフから

松永 謙矢

入居して4年半、被災者はようやく仮設住宅から引っ越すことができ、それと同時に「再建」と「自立」という言葉を聞くようになりました。しかしながら、3月が近づくと「思い出して夜も眠れない」と話す方、移転後に環境の変化から体調を崩す方もいて、むしろ仮設を出た後の方が重要だと現場で感じています。復興も個人差が出る中、これからも一人ひとりの被災者の声を聞きながら、課題解決に向けて七ヶ浜とともに歩んでいきます。

郷古 明頌

七ヶ浜町に来て5年。七ヶ浜町民の皆さん、支援者の皆さん、本当にたくさんの皆さんの想いにふれました。そんな中、町民の方から「全国・全世界の応援してくれた皆さんのおかげで“今”がある。精一杯生きて、恩を返したい」とお話しをされました。2011年では聞くことが無かった言葉です。その思いに感謝と尊敬の念を抱きながら、七ヶ浜町と七ヶ浜町の住民の皆さんのためにこれからも共に歩んでいきたいと思ひます。

槇島 江梨佳

震災から5年、復旧から復興へ。町や生活の変化

だけでなく、町民の方の心の変化も近くで感じることでできた1年でした。そんな今だからこそ聞こえてくる声をしっかりひろい、町民一人ひとりのペースに寄り添いながら、そこから生まれてくるものを大切に、活動していきたいと思っています。

鈴木 こず恵

今年は、はまのわ実行委員会の皆さんと「しちがはま展覧会はまのわ」を行い、七ヶ浜に住んでいながら初めて知ることがたくさんありました。復興が進み、今まで明かりがともらなかった場所に灯りがだんだん着いていくのを目にして嬉しくなります。これからも微力ながら今までできた人の輪を大切にして活動していきたいです。

竹ヶ原 壮志

足湯ボランティア、アルバイトなど、休日のほとんどを七ヶ浜で過ごす大学生生活を送ってきましたが、ただの大学生が仮設住宅から公営住宅や高台への移転、防波堤の建設などさまざまな変化、そしてそれに伴う人の変化を身近に感じられることを光栄に思います。お世話になっている町民の方々への感謝と敬意を忘れず、謙虚な気持ちで今後も七ヶ浜に関わっていきたいです。



認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード
東日本大震災 被災者支援
2015 年度 活動報告書

2016 年 3 月 31 日発行

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード
名古屋事務所

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

tel 052-253-7550

fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web <http://rsy-nagoya.com/>

twitter rescuestockyard

facebook rsy.nagoya

七ヶ浜事務所

〒985-0802 宮城県宮城郡七ヶ浜町字吉田浜 5-9

老人福祉センター浜風内